

# 受念寺だより

真宗大谷派 岸上山 受念寺

大阪市住吉区万代 5-17-25

電話 06-6674-1135

ホームページ [junenji.publog.jp](http://junenji.publog.jp)

虚偽に虚偽を重ね

あなたは何者になろうとするのか

平野  
修

東本願寺の向かいに「総会所」と呼ばれる仏法聴聞の場があります。その歴史は古く、これまで四度焼失した東本願寺の再建のため全国から集まったご門徒の集会所として開かれ、以降聞法の場となったところですが、残念ながら本年の六月で長い歴史に幕を閉じました。その前の掲示板にこの言葉が書かれていました。

親鸞聖人は自らのあり方を、『教行信証』の中で善導大師の『観経疏』の文によって確かめられます。

「外に賢善精進の相を現ずることを得ざれ、内に虚偽を懐いて、貪瞋邪偽、奸詐百端にして、悪性侵め難し、…三業を起すといえども、名づけて「雑毒の善」とす、また「虚仮の行」と名づく、「真実の業」と名づけざるなり。…この雑毒の行を回して、かの仏の浄土に求生せんと欲するは、これ必ず不可なり。」

(訳…外に賢く善き人が精進しているような姿を現すことのないように。内には虚偽を懐いているのであり、貪り、瞋り、邪、偽り、悪巧み、など「苦の原因となる」様々な悪性はとどめ難い、…三業の行を起すと言って「毒の混じった善」であり、「虚仮の行」であり、「真実の行い」とはいえない。…この雑毒の行をふりむけて、かの仏の浄土に生まれようと求めても、それは決してできない。)

「何をもってのゆえに、正しくかの阿弥陀仏、因中に菩薩の行を行じたまいし時、乃至一念一刹那も、三業の所修みなこれ真実心の中に作したまいしに由ってなり、と。(訳…なぜなら、正しくかの阿弥陀仏は、さとりを得ようとして菩薩の行を行じられていたとき、一念一刹那も三業によって修められたものは、すべて真実の心の中になされたものだからである。)

私たちは仏の願いに耳を貸さず、自ら虚偽を重ね、自ら迷っているのではないでしょうか。

## 悲しみの真っ直中で 悲しみを超える道

小児科医である弟と会ったときの話しである。小児科の中でも新生児科を担当している。新生児科は重度の未熟児のお子さんや、重い障害を抱えて生まれたお子さんも多くおられ、医療の関わり方について非常に難しい場面があるという。積極的に治療すれば少し長く生きられるかもしれないが、とても助かることはない場合、どこまで治療するべきか。治療して助かってもしも重障害が残る場合、どこまでするべきか。そのように、常に生命について考えさせられる現場である。

話しの中で、残念ながら死産になってしまったときのお母さんの話しを聞いた。そんなとき、お母さんに赤ちゃんを抱いてもらうようにすることが、お母さんの精神面にとってもいいとされ、そのように勧められました。ところが、臨床研究の結果では残念な結果が出ているというのである。

Behaviours that promote contact with the stillborn infant were associated with worse outcome. Women who had held their stillborn infant were more depressed than those who only saw the infant, while those who did not see the infant were least likely to be depressed (13 of 33, 39%, vs three of 14, 21%, vs one of 17, 6%,  $p=0.03$ ).

死産の新生児と触れあうことを奨励する行動は、より悪い結果に結びついた。死産の新生児を抱いた女性には、見ただけの女性よりもうつ状態が重かった。一方、新生児を見なかった女性は最もうつ状態が軽かった。

(Hughes P, et al., Assessment of guidelines for good practice in psychosocial care of mothers after stillbirth: a cohort study. *Lancet*. 2002 Jul 13; 360(9327): 114-8.)

つまりこの論文では、お母さんが亡くなった赤ん坊を抱いたら、見ただけのお母さんより、うつ状態が重くなるという「悪い結果」となった。見もしなかったお母さんが、最もうつ状態が軽いという「良い結果」となった。したがって、死産の新生児と触れあわない方がよいのではないか、という結論である。しかし果たしてそうだろうか。

うつ状態を当然のように「悪い結果」としている。医学的にはそれが当たり前かもしれない。しかし「うつ状態になるほどに、亡くなった赤ん坊のいのちを大切に受け止めた」とは言えないだろうか。うつ状態が軽いことを「良い結果」としているが、赤ん坊を見もせず、まると「良かったこと」にして通り過ぎてゆくことが果たして良いことだろうか？

「うつ」というのは確かにとてもつらいことである。しかし、初めからそれを「悪い」という価値でしか見ず、その結果からさかのぼって、赤ちゃんを抱くということまで意味のないこととしてしまつてよいのだろうか。まるで、現代社会で学校から会社まで「成果」でしか評価されず、それを前提としたことにしか関心が向かない、「成果」がでないことには価値がない、という見方しかできない社会の現状が、ここにも現れているようにある。うつは大変つらいことであるが、「うつは悪い」という予め決められた価値しか持たない世の中を生きなればならないことが、より一層窮屈で苦しいことではないか。

一見「悪い」と思われるところに大事な価値がある。予め決められた「良い」「悪い」の価値をこえた第三の価値が確かにある。そのことが実感できる世の中がほんとうに安心できる世の中ではないか。立場をこえて、痛みをもつたいのちを生きることを互いに敬い合える世の中なのではないだろうか。深い心の痛みは直ぐには消えないけれど、その痛む心のままで、痛みをこえるということがあるとすれば、その痛みの「意味」が変わることなのではないか。

「悉能摧破有無見 宣説大乘無上法 証歡喜地生安樂」(親鸞「正信偈」)

「そのことがらに意味が」有る、無いとする「ほんとうの価値を見えなくするよな」見方をことごとく破り、立場をこえてすぐわれるこの上ない教えを説き、歡喜地という証を得て、安樂浄土に生まれる。

赤ん坊を亡くしてうつになる心の痛みについて、経験したことのない私が語れるものではない。ただ、うつが単なる悪い状態にとどまるのではなく、その痛みの大事な意味に気づいてほしい、という赤ん坊からの呼びかけが聞こえたなら、いや、たとえ聞こえなくてもその呼びかけを聞こうとし続ける限り、その痛みをなくすことなく、それをこえてゆく道が開けてくる。むしろその痛みがそのまま、掛け替えのない人生そのものとなってゆくのではないだろうか。

しかし、このことは自らの心の痛みの中で確かめて、初めてそうだといえることだろう。「なかったこと」にしたいほどの痛みの真っ直中にいる私が、私中心の善悪、有無の見方をこえて、ただただそれをそのまま仏の教えとして、自分の底から湧き上がるいのちの声として、耳を傾ける。痛みをもつた自分をそのままに受け入れる世界があるという、仏の教えが聞こえるか。今ここにはただ、自分の求める「良い結果」に縛られてもがいている私がいるではないか。だからこそ、生きてすべきことがある。

(ブログ「お医者さんはお坊さん」junenji.blog.jp 二〇一四年十月十五日の記事を改編)



## インド旅行記(一) デリー到着

二〇一五年三月三日(火曜日)

いよいよ今日からインドの旅が始まる。テーマは「仏陀の旅路」である。『大般涅槃経』(マハーパリニツバーナ経)には、仏陀釈尊が般涅槃される(亡くなられる)までの旅路が記されている。そのルートを中心に、現地大学との研究交流をしつつ、仏跡を巡る。

「紙上に書かれた思想は、砂上に残った歩行者の足跡に過ぎない。歩行者のたどった道は見える。だが歩行者がその途上で何を見たかを知るには、自分の目を用いなければならない。」(ショーペンハウエル『読書について』)

出発前にある方よりこの言葉をいただいた。釈尊がその人生の旅路で見たものは何だったか。それは一生の課題であるが、ともかく、時代は違えど釈尊の過ごしたインドの空気を吸い、においを感じ、地を踏みしめる機会ができたことはありがたいことである。

昼頃に大阪・関西国際空港に集合し、午後一時二十五分発の Air India にて香港経由でデリーに向かう。機内食は早速インド料理っぽいもので、味もなかなか美味しい。旅への期待が高まる。

現地時間の午後九時三十五分、デリーに到着。日本から約十一時間半ほどであったが、それほど長くは感じなかった。到着ロビーでのデリー出身のジャギーさんと合流。これから十

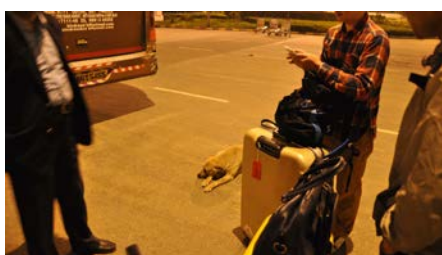


日間お世話になる現地のガイドさんだ。お客様は神様ではなく家族、というジャギーさんのおかげで、旅中の数々のわがままにも温かく対応していただき、十日間無事楽しく過ごすことができた。



を、これから存分に知ることになる。

一方、よく考えると最近日本で野良犬を減多に見ない。昔はもう少しだった気がする。これは日本では狂犬病の発生を予防するため、行政が積極的に保護、殺処分しているからである。最近しきりに「安心・安全が大事」などというが、人間の生活上の安心・安全は他の生き物の生命を奪うことで成り立っているのである。それを忘れてはならない。そのことを忘れ、つくられた安全を享受しながらそれをあたりまえだと思ひ、いただいた生命でありながら自分の生命は「私のものがある」と思い込んでい。そんな思い違いをしたままで、自分は生命を奪っていない、生命を大事にしているといひ、善人を気取ることはできない。



さて、そうこうしているうちにホテルに着いたのは午後十一時頃であった。時差は日本よりマイナス三時間程度なので、日本時間では午前二時半頃である。私は入眠時刻がいつも遅いのでこれぐらいの時差は気にならない。また異国の地で興奮しているのか全く眠くない。しかし明日のことも考え、すぐに床に就く。三月のこの時期、インドの夜は意外と涼しい。薄着で寝てしまい、ベッドの掛け布団も薄く、寒い。寒いのと、興奮しているのと、外が何やら騒がしいのと、隣のK君のいびきとで、結局ほとんど眠れず朝を迎えてしまった。

(次回 インド旅行記(二) マハトマ・ガンディーの足跡)

受念寺の歴史(第三回)

折屋町時代(江戸時代初期)

一六一五年(元和元年)〜一六二八年(寛永五年)の十四年間

任職

第五世圓誓

(一六一三二年(寛永八年)七月十二日寂)

第六世圓了

(一六四〇年(寛永十七年)十月十三日寂)

折屋町移転

一六一五年(元和元年)第四世圓正\*(一六〇三年)のとき、池田町から折屋町(現在の大阪市中央区大手筋二丁目辺り)へ移転します。唐物屋新左衛門屋敷を借りて道場を移したとされています。移転の理由は不明です。

## 四代圓正

正徳二年ヨリ池田町居住之間  
元和元年迄二十三年之居住

千時元和元乙并年大坂折屋町祖父  
唐物屋新尾衛門屋敷ヲ借リ用ニ彼ノ  
天満池田町ノ道場ヲ引キ移シ建テ畢ニテ

(＊年代から第四世ではなく第五世圓誓(一六三一年)の誤りと思われれます。)

## 大坂冬の陣、夏の陣

一六一四年は大坂冬の陣、一六一五年は大坂夏の陣のあった年です。記録が無く全くの想像でしかありませんが、ひよっとしたら戦火が影響していたのかもかもしれません。

〔第四回 片原町時代(江戸時代初期〜後期)です。〕



## お寺は何をすることでですか？(2)

前回は、お寺がどのような願いから生まれたのか、ということに思いを馳せてみました。それではお寺は具体的に何をするといいところなのか？今回から3回にわたり、それを見ていくことにしたいと思います。

答え1…聞法の場合です。

「聞法」というのは「法に聞く」ということです。私たちは生活の中で何か難しい問題に直面する、どうにもならず行き詰まる、ということがあります。問題ははっきりしないが「なんとなく空しい」「なんとなくさみしい」とか「このままでいいのだろうか」ということもあります。

そんなとき私たちは何かしらの答えを求めます。そうして自分の中で考える、他人のアドバイスを聞くなどということを行います。そして数ある選択枝の中から「自分にとって都合の良い選択枝」を探し出そうとします。ですから、自分で考えようと他人に尋ねようと、結局は「自分に聞いている」ということでしょうか。確かに自分が納得しないことには前に進めませんし、問題を抱えているのは他ならぬ自分です。しかしその頼りにしている自分の中に答えがない、自分というものがよくわからない、さらに言えば、実は問題が自分自身にあるということがあります。「こうなりたい」「こうすべきだ」という自分の中の答えに縛られているのです。

「法に聞く」と言う場合、「法」というのは仏教の教えということですが、その法に「何を聞くか」が問題です。「自分にとって都合の良い選択枝」を聞くのであれば結局は「自分に聞いている」ことになります。法に聞くのは「自分自身」です。「自分のものの見方」「自分の生き方」といつても良いかも知れませんが、つまり寺というのは「自分自身を学ぶ場」といえるかもしれません。「人間を学ぶ」と言ってもいいでしょう。人間であるがゆえに求め、人間であるがゆえに悩む。私たちは何を求め何に悩むのか、その中身を確かめるといえることです。住職が尋ねてきた人に何か上から下へ「説教をする」ということではなく、住職も一緒にあって仏教に照らされながら自分自身を学ぶ場であるといえます。

〔次回 お寺とは何をすることでですか？(3) 答え2 です。〕

## 編集後記

今年の夏は東本願寺主催の「安居あんご」に参加してきました。むかしインドでは雨期に一か所に集まり仏法を学ぶ期間がありました。その名残をうけついで、毎年夏に約二週間の聞法の会が開かれます。全国からたくさんのお僧侶が集まって仏法を学びます。今年は本多弘之先生、一郷正道先生が講義をされました。

大学生から年配の方まで様々な年代の人たちがあつまって講義を聴き、「攻究」と呼ばれる時間では机を囲んで議論します。大変有意義な時間を過ごさせていただきました。その時のことはお話の中で、また紙面上で反映できればと思います。二週間もお寺と病院を休ませていただき、皆様には大変ご迷惑をおかけしました。

(文責…副住職 正仁) \*副住職ブログ「お医者さんはお坊さん」[junenji.blog.jp](http://junenji.blog.jp) もご覧ください。

## 軽費老人ホーム 受念館

### 入居者募集中！

- ☆「住みよい居室」「おいしい食事」を「軽費で」ご提供。
- ☆ 心のふれあいを大切にする、昔ながらのアウトホームであたたかな安心の生活環境。
- ☆ 60歳以上で食事が自分で取れる方なら、どちらにお住まいでも結構です。

施設見学は午前10時から午後5時まで。いつでも受け付けております。

◇お問い合わせは・・・  
06-6674-1181 までお気軽にどうぞ。  
ブログ：<http://52664141.at.webry.info/>